田中正造の聖書観

竹中正夫

近年公害問題の擡頭にともなって、田中正造の生涯とその思想が再評価されている。先世紀の終りから今世紀にかけて、ただ一筋に鉱毒の被害をうけた農民たちとともに、苦闘した生涯は、日本における公害問題ととり組んだ先駆者であった。とくに、近年の研究において、一九〇四（明治三七）年田中正造が退（た）ちのきを命じられた谷中村に入って、死に至るまで少数の農民たちと生活を共にしながら、一意専心公害の徹廃のために尽力した姿が浮きぼりにされ多くの人びとに感銘を与えている。今日のように情報の交換が盛んに行われ、公害に対する一般の人びとの関心も広がり、被害者の組織化が徐々になされてきた時代とちがって、田中正造の時代は、多少の支援者があったにせよ、それらは、少数の人びとに限られており、かつ断片的なものであった。田中正造の歩みは、きわめて孤独なものであった。彼は好んでしばしば自らの歩みを大雨に打たれて重荷をひく牛になぞらえて歌っている。

○大雨にうちたたかれて牛のひく　車のわだち跡かたなくも　（明治三二年五月一〇日）

○大雨にうたれたたかれ行く牛の　車のあとのあわれなりけり　（明治三三年二月一二日）

○大雨にうたれたたかれ行く牛の　見れば車のあとかたもなし　（明治四四年五月）

○大雨にうたれたたかれ車ひく　牛の重荷のあとかたもなし　（大正元年一二月一六日）

彼が現実から逃避することなく、大雨に打たれ、たたかれ、その車のわだちがあとかたもなく消えてしまうことを知りながら、なお日々に新らたに歩みつづけることができるのは、単なるヒューマニズムによるものではなかった。彼は自分の心情をつぎのように表現している。

○能はざる事の多かる人の身も　神のまにまになし能ふらん　（明治四一年八月）

と詠んで人事を尽して天命を待つ姿勢をもちつづけた。その根底ははは、「神を知らざれバ人ハ失望す。予が政治ニ倦めるときハ神をしらざれバなり。」（全集Ⅻ巻三三五頁、以下数字のみを記す）という宗教的信念があった。彼にとって、宗教は、きびしい現実から彼岸へと人を逃避させるものでなく、また人間の自己否定や修行により理想実現をめざすものでもなく、日々の生活を生かす天与の賜物であった。本稿において、田中正造は、まず宗教をいかに把握したかを吟味し、さらに彼がその中でとりわけ大切にした聖書をどのように理解したかについて吟味してみたいと思う。本稿の資料としては、田中正造全集（全一九巻）を用うることにし、そこに出てくる宗教倫理についての彼のことばをカードに書きとり、項目別に整理する作業を重ね、とくに聖書のことばの引用箇書を書き出して分析することにした。(2)

宗教思想

彼の聖書観を検討する前に彼の宗教観を瞥見することにする。田中正造は、生来宗教心に富んだ人であった。当初は、特定の宗教を信奉するのではなく、広く人道を天神の道とし、「東洋青年仁会」と名づける修養団体に関心をもっていた。その総則にはつぎのように記されている。

東洋仁会ハ人ノ此世ニ生レタル所以ヲ学バンタメ、天を畏れて師とし、徳を尊びて宝とし、家庭を賢良ニ進メ、廉恥を堅守シ、誠心誠意己レヲ推シ業ヲ勤メ、信義ヲ敬重スルヲ始メトシ、真誠自然の幸福を穏当ならしむるため、天地の公道、普遍の常識を

法則トシ、別ニ定ムル細則ナシ。（X二三、M33・2・16、Mは明治、Tは大正の略、以下数字は年月日を示す）

この時代の田中正造は、普遍的な真実なる神を信じ、それを天神とよびその憐みにこたえて歩むところに人間の使命があると理解していた。（XV六、M32・8・17）

彼は、また、広く儒教、仏教、キリスト教の三教に関心を寄せ、しばしば、その三教の中心人物である孔子、釈迦、キリストについての比較をなしている。もちろん田中正造の表現には、多少比喩的なものがあり、その都度必ずしも一貫した内容をもっていないし、その意味するところには独自なものがある。しかし、つぎのような一連の表現に、彼がそれらの三教をどのように把握していたかを知ることが出来る。

○耶蘇派ハ天帝ヲ怖レズ。仏ハソラ念仏ヲ公然恬然なり、神道ハ散参銭箱ノ各地方ニ出張ヲ設ケテ郵便箱ノ如シ。（X三六、M31・4・30）

○孔子は皮相より神に入る。キリストは神より神に入る。シャカは心理より心理に入る。（XI四、M40・12・21）

○釈迦は心に神を見て口に説き、キリストは目に見、事に行ふ。孔子は政治に写して政治に見る。（XI六、M40・12・21）

○孔子ハ之ヲシルナリ。釈迦ハ之ヲ説クモノナリ。キリストハ之ヲ貫クモノナリ。（XVII三〇、M42・1・21）

これらの引用からも田中正造が、三者をすぐれた師として尊敬していたことは明らかである。孔子は、政治的秩序において、釈迦は脱俗において、キリストは、真理実践においてすぐれているとし、自らはキリストに従うと表明している。

○孔子は俗事に熱誠なり、釈迦は脱俗、空虚、キリストは真理実践、予はキリストをつとむ。（M45・4・23）[3]

キリスト論

孔子、釈迦、キリストの三者をそれぞれ尊敬しながらも、その中で田中正造は「キリストをつとむ」と表明し、聖

書をよみつづけた。それでは、彼は、キリストをどのように理解したのか、そして何故にキリストに従うこととしたのであろうか、谷中の人びとと共に生きることに徹していた田中正造は、神学を学んだこともないし、キリスト論について体系的な研究や執筆をしているわけではない。そこで全集に収められている彼の文章のなかからキリストについて触れているものを摘出し、彼が、どのようにキリストをとらえているかを吟味してみることにする。

○人の光りハ神よりうけて神と合し、神と同一ニ光るあり。キリスト即ち之れなり日の光りをうけて照されて光る。是聖人の行へなり。聖の光りハ人類を照らす最モ大ヘナルモノナリ。然れども其渾てが神ニ合するものハ、実践上におゐて只キリストあるのみ。キリストの光りハ他の聖人の光りとハ同じからず。タトヘバ光りノ強キモノナリ。（Ⅺ三八、M42・8・27）

○予ハ天然ノ中庸論を云ふ。又釈尊ノ中庸、キリストノ中庸ヲ云ふ。孔子ノ人類社会を兼ぬ、故ニ自ら中庸難しと云ふ。キリスト釈迦ハ克常に安ンジテ中庸ニ居レリ。又曰ク、釈迦ハ民間ニ居ルハ人類界の真理を得んためなり。之を得て訳して演ぶ、即ち説法となる。見よ、材料山海より多き、民間の活動、人心離合、縁果、掌ニ見る如くなり。今や人釈尊を信仰して真理を言語ニさとらんとす。木により魚を求める如し。可憐、衆生のさとらざる久し矣。故ニ曰ク、キリストの十字架ハ中庸の中庸たり。而モ明カナリ。（Ⅺ三六〜三七、M43・4・14）

○今の世ニ何故ニキリスト出でざるが〔カ〕、キリスト独リ上下の間ヲ貫きて一切の救ヘヘ主たるをしるなり。（Ⅻ三七、M44・5・9）

○人ノ名　スクイヌシ　イエス　キリスト、救主ノ総名　洗礼ヲ受ケシ人（Ⅻ六四、M44・2）

○キリストノ殺されて一般を救ふの大なるありて殺されたり。キリストニしてはじめて此任ニ当る。神亦当らしむ。故ニ恨みず、逃げず、自若として殺さる。進退神と合す。（Ⅻ八四、M45・2・10）

○キリスト人ニ生レテ人ニアラズ、神ナリ。然レドモ神ノ全躰ヲ悉ク合セ得ルモノニハアラズ。神ノ全躰ノ大部分ヲ無形中ニ学ビ得テ、之ヲ実行セル神ナリ。（中略）キリスト〔ト〕雖日月限リアリ。スベテ神ニ合セルヲ公示スルニ至ラズ。スベテ合スルニ到ラザルガ故ニ、神ニアラズト云フカ。否キリストハ神ナリ。キリストハ聖人ニシテ神ナリ。大聖人ニシテ大ナル神ナリ。（Ⅻ四二〜四三、M44・8・28）

由来キリスト論において最も注目されるところは、キリストの両性を認めるか否かということである。すなわち、キリストの人間性を認めて神性を認めないならば、キリストは、聖人であり預言者となる、反対にキリストの神性を

認めて人間性を認めないならば、キリストは超越的存在となり、現実との切点が稀薄になる。キリストが神にして人であるという告白は、キリスト論の最も中心的課題であるが、田中正造は、それをはっきりと表明していることは、興味深いことである。また、多くの救い主のなかの一人として、キリストを認めるのでなく、他のものと同列視せず、独自なものとして受けいれている点も見逃してはならないことである。

聖書との出あい

従来から、田中正造の研究において指摘されていたことは、田中正造がとりわけ晩年において、キリスト教の信仰を深めてきたということである。たとえば『田中正造全集』の編集にあたられた由井正臣氏はつぎのように記している。

> 晩年の正造はキリスト教への信仰を深くした。二五年七月入獄中にはじめて聖書を読んで以来、新井奥邃に導かれ、あるいは鉱毒問題、谷中問題を支援してきたキリスト教徒との交りをつうじて信仰は深まったといえよう。そして一時は洗礼を受けようとしたこともあったが、ついにキリスト教に改宗することなくおわった。(4)

正造が新井奥邃と出あい、その影響をうけて、キリスト教へ接近していったことに着目して、新井奥邃のキリスト教思想を研究することはきわめて重要なことである。(5) また、彼は鉱毒問題に関心を示したキリスト教徒たちとの交友のなかからキリスト教について学んだことも確かである。(6) さかのぼると明治三五年六月に、裁判傍聴中にあくびをしたことから「官吏侮辱の罪」に問われて、四〇日ほど投獄されたとき、新約聖書をおくられて、それを読んでいらい、新約聖書を読むようになった。明治四三年六月二九日の日記には、「神若し我ニ三年の寿を以てせバ、新約聖書を読畢らんか。わがみの願ハ誠ニ深き御願なり」とのべている。(7)

そして、伝えられるところによると、彼が渡良瀬川の河畔に七二歳の生涯を閉じたときに、頭陀袋に入れられていた遺品の中には、新約聖書があり、さらに遺品中には分冊の「マタイ伝」と帝国憲法とが綴じ合されていたという。[8] 寧日のない谷中の日々にあって、彼はゆっくり聖書を読む充分な暇はなかったにちがいない。しかし、その中で、彼は聖書を実践の書として谷中の生活の中で繰り返して読んでいた姿をうかがい知ることが出来る。今彼の聖書研究に対する姿勢をあらわすことばを全集のなかから年代順に辿ってみることにする。

○今後は聖書ニ付、一ヶ条ヅツ、最モ難題の処の研究を、諸士に仰ぎ度候（Ⅷ三五、M41・5・24）
○人幼時より聖書をよみて暗記するも、時々ニ之を復読せざれば、殆んど怠る、之れ人より神に近くの難き所以なり常に神の側に居る如くせんと欲せば、聖書を常ニ読むをよしとす。（Ⅺ一六四～一八五、M42・3・31）
○前稿キリスト青年会ニ対して禁煙の誓ヲ破ル。之れ聖書を読まざる故なり。（Ⅺ一六八、M42・3・31）
○聖書未だ読まず。只三十五年ニ少ミ獄ニ入リテ一回読ンデ分ラヌ。誓フベカラズトアリタルヲ見タリ。（同上）
○聖書ヲ読マンカ、聖書ヲ読ムヨリハ先ヅ聖書ヲ実践セヨ。聖書ヲ空文タラシムルナカレ。（同上）
○我聖書を読むひまなしと思ヘバ誤りなり。聖書ハ読むニあらず。行ふものなれバなり。（Ⅺ三六、M42・6）
○人生幼少ノトキ早ク聖人ノ書ヲ読スベシ。幼少ハ聖ニ近シ。故ニ覚ヘ易シ。人ハ多少ノ名誉心ナキモノハ稀レナリ。（中略）耳ニ入ルモ心ニ入ラズ。心ニ入ラズ。心ニ入ルニ実行ニ難シ……。我幼ニシテ論語ヲ、キリスト旧約ヲ暗記ス。（Ⅺ三〇～三一、M42・7・2）
○又、左山の娘、仙作の妻、此婦人女子、自に文字なしといいども、竊ニ何かの神を尊信し、東京婦人より与ヘハれたる馬太伝の小冊を大切ニ懐ニセして見たり（Ⅳ六三、M43・9）
○聖書ニ清き納涼あり（Ⅻ三六、M45・4・24）

一方においては、多忙のために聖書をもつと、読みたいというおもいをもちながら、正造は、聖書を繰り返して読むことを提唱すると共に、聖書は読むものではなく、実行するものであるといって、聖書の真理を体して日常生活に生かすようにつとめた。

今日、世界の教会において、それぞれの人がおかれている具体的な状況の中で、聖書を学ぶことが強調されているが、田中正造は、自らの生活の場において聖書を学ぶことを説いてやまなかった。その場というのは、彼が残留民たちと共に生活をした谷中村であった。彼は、谷中の人びとに、聖書を文字上の過去の記録として読むのではなく谷中の残留民の体験にてらして聖書を学び、聖書の視点から谷中の生活を吟味することを説いている。

○見よ、神は谷中あり、苦痛中ニ得たる智徳、谷中残留人の身の価ハ聖書の価と同じ意味で、聖書の文字上の研究よりハ見るべし。学ぶべきハ、実物研究として、先ツ残留人と谷中破滅との関係より一身の研究を為すべし。徒らに、反古紙を読むなかれ、死したる本、死したる書冊を見るなかれ、聖書にくらべて谷中を読むべき也（XX二六年、T2・2・12）

聖書を過去の記録の書として読むのではなく、ちょうどイスラエルの民がエジプトの捕囚から解放する神の働きを体験したように、谷中の中にともにいます神の働きを聖書によって学ぶ実体的聖書の研究の姿勢をみることが出来よう。

聖書のことば

それでは、田中正造は、谷中の状況の中でどのように学んだのか。彼はどのような聖句を愛誦していたのか、あるいは、聖書の数多くの名句の中で、どういう聖句が彼の心を打ったのであろうか。これについても田中正造は系統だった叙述を残していない。そこで、全集一九巻を通読して、聖書のことばの引用と思われるもの、または、聖書のことばのそのままでないにしても、明らかにそれにちなんで記されたものと思われるものをカードに摘出し、それらを、聖書の章節の順に配列してみた。

○人はパンのみにて生くる者にあらず（マタイ・4・4）

XI二四（M42・5・28）、XI三七（M42・6・26〜30）、XI三五（M42・7・6）、XI二九八（M42・8・6）、XI三〇一（M42・8・6）、XI三三〇（M42・8・26）、XI三五四（M42・10・22）、XI四一四（M43・6・14）、XIII一〇五（M43・5・11）、XI四一七（M43・6・16）、XI四一九（M43・6・29）、XI四一九（M43・7・2）、XI四二一（M43・7・3）、XII二三（M44・4・20）、XII一五四（M44・5・10）、XIII五（M45・1・5）、XIII三（M45・1・11）、XVIII六〇〇（M45・3・24）、XVIII六二（M45・4・5）、XIII二五四（M45・6・2）、XIII三八〇（T2・1・3）、XIII三八三（T2・1・6）、XIII四七四（T2・7・13）、XIII四七五（T2・7・13）

○悔へ改めざれ．清よからず（マタイ・4・17）

XI二七一（M42・7・28）

○一切をすてて我ニしたがいと（マタイ・4・22）

XI三五（M42・7）

○貧シキモノハ　幸ナリ（マタイ・5・3）

XII四二一（M44・8・28）、XII四三三（M44・9・1）、XIX三五〇（年月日不詳）

○貧しきもの、哀むもの、柔和なもの……（マタイ・5・3〜10）

XIII三八三（T2・1・6）

○ウイカワク（飢）如ク義ヲ慕フ（マタイ・5・6）

XIII三九八（T2・1・10）

○天の神ハ之ヲ見て居らるるなり（マタイ・5・18）

XII六〇（M44・2）

○汝の左の目汝ぢを汚さんせバ、先づ其目ヲ抜きて捨てよ、（マタイ・5・29）
XIII四（M45・1・5）
○教へて曰く、天ニ誓ふなかれ、
XII二五（M44・6・27）
○人汝ぢの左りのほ(頬)をたゝくものあらば、右のほをもめぐらしてうたせよ（マタイ・5・39）
XVII三三（M41・4・11）、XII三〇（M44・4・19）
○一日十里を行くものあらバ、我ハ之を二十里行かん。（マタイ5・41）
XI三〇七（M42・8・27）
○汝ぢの敵を愛せよ（マタイ5・44）
XVII二四五（M40・12・27）、XII三三（M44・7）
○あしき人のためにも無事をいのるなり（マタイ5・45）
XIII三六（T2・1・10）
○左ニ手ニて物を人ニ与ふる、右ニしれぬよふニせよ（マタイ6・3）
XI二九（M42・7・8）
○キリストハ宝を天ニ収めよと。（マタイ6・20）
XIII四九（T2・3・12）
○之れ聖書二ノ主ニ使(仕)ふべからずとあり。（マタイ6・24）
XII三七（M44・7・11）

○野の花の天に造られしまゝほど奇麗なるハなし。（マタイ6・28）
XI四〇（M43・7・14）
○人ハ一日の業を以て足れりとハキリストの教へなり。（マタイ6・34）
XIII五四（M45・2・3）、XIX三〇八（T2・3・18）、XIX三五五（T2・7・4）
○つとめよ門ニ入るの人、門の入り口ちの狭きに怖るゝなかれ。（マタイ7・13）
XI三三一（M42・8・26）
○枕する処なからんや（マタイ8・20）
XI三七（M40・5・8）
○キリスト又賜く、死せるものハ死したるものをともろふべしと。（マタイ8・22）
XII三三三（M44・7）
○古きかわの袋に新酒を入るゝなかれとハ聖書の教る処なり。（マタイ9・17）
XII四五（M44・2・3）、V四三〇（M44・5・18）、XII二四四（M44・5・19）、XII三八〇（M44・6・26）
○キリスト曰ク、二枚ノ衣ヲ持ツナカレ云ヘト。（マタイ10・10）
XIII四三六（T2・3・24）、XIII五三七（T2・7・17）
○キリスト曰ク、表ハハト鳥リの如クヤサシク羊ノ如ク穏カナレ、心ハ蛇ビノ如クカシコケレ（マタイ10・16）
XI六〇三（M43・12・30）
○教に曰く、終りまで遂ぐるものは天の父の報を得んと。（マタイ10・22）
XI二九二（M42・8・6）、XIX三四（T2・3・23）

○我身心を動かさず天の父真の神の前ニ正しき行いをなさバ、天のほしハ必ずめぐりて我前ニ来る也。（マタイ10・22）

XIII三五（T2・1・9）

○キリスト、ヨハネを論じて曰く、彼れハ人の子としてハ大へなれども、天より見れバいと小さきものなりと。（マタイ11・11）

XX三六（T2・1・24）

○聖書の教ニも、悪しき土ニハよき種まきても生ぜぬとのたとい、（マタイ13・4～7）

XVII三七（M41・6・27）

○目あるものは見るべし。（マタイ13・9）

XI二四（M42・7・6）

○五ツノパンハ神秘なり。（マタイ14・17）

XI二八（M42・7・3）、XII四三（M44・8・28）、XIII四三〇（T2・3・13）

○学者トパリサイの人（マタイ16・12）

XII一九（M44・4・9）

○キリスト曰ク向ふの山を引き付けるも出来る。此言誠に然り。（マタイ17・20）

XI九（M41・8）、XI二五（M41・9・20）

○キリスト曰ク、祈リト断食トニアラザレバ能ハザルナリト（マタイ17・21）

XII三三（M44・7）

○己レノ如ク爾(なんじ)ノ隣リヲ愛スベシ（マタイ19・19）

XII五三（M44・11・4）

○汝ぢハ汝ぢの所有をすてよ、と云ふ難き事図らざるなり。而モキリストハ之れを人ニ告げてすてさせたり。（マタイ19・21）

XII二四（M44・6）

○キリスト曰ク、富めるものゝ天国ニ行くハらく駄(駝)の針の穴をくぐるよりかたしと賜われたり。（マタイ19・23）

XI三五（M42・7・8）、XII三四（M44・8）、XIII五〇八（T2・6・7）

○キリスト曰ク、前なるもののちとなり、のちなるもの先きとなると。（マタイ20・16）

XIII三四〇（T1・9・22）

○のち十字架ニ付せらるゝ前、キリスト己ニ之をしる。（マタイ20・19）

XII三三六（M44・7）

○キリスト教ヘテ曰ク、人の上たらんものハ、先ヅ人の下部となれよと。（マタイ20・26）

XI二六二（M42・7）

○キリスト曰く、形を造るなかれと。（マタイ23・25）

XIII二八四（T1・8・5）

○イリ〳〵　ラマ　サバクタニ

我神、何ゾ我ヲステ賜フヤ。（マタイ27・46）

X四六四（M36・7・6）、XI三三三（M42・11・13）

○人其友ノタメニ生命ヲ棄ツ、之ヨリ大ナル愛ハナシ。（ヨハネ15・13）

Ⅻ三七（M44・7・21）

○上ニアリテ権ヲ司ルモノニ渾テ人ニ従フベシ。ソハ神ヨリ出デザルナク、凡アル処ノ権ハ神ノ立テ賜フ処ナレバナリ。（ローマ13・1）

Ⅺ三〇六（M42・8・27）、Ⅻ五二一（M44・11・4）

右にあげた聖句集はいづれも『田中正造全集』に収録されている文章のなかから、聖句と思われるものを書きとどめ、それを聖書の順序にしたがって配列したものである。もちろん、田中正造は、引用聖句の出典箇書を記していない。どこからとったかについては、聖書にでらしてわたしが記入したものである。

これらの田中正造聖句集を作製してみて、重要と思われる点をいくつか指摘しておきたい。

第一に感ずることは、晩年の田中正造の文章には、可成り多く聖書のことばが引用されているということである。同じ聖句の引用を含めると全体で八四回に及んでいる。彼は、「キリスト尚一層しらねバならぬ。しれバ信ず。信ぜバ厚し。厚けれバ仰となる。信仰茲ニ備る。」（Ⅻ三三、M44・7・21）と記し、そのあとに「平民の福音　山室　十銭、新約書　聖書　五銭」と書いている。おそらく、山室軍平の『平民の福音』と『新約聖書』を買い求めた記録ではないかと思う。彼はさきに引用したように、「聖書ハ読むニあらず。行ふものなれバなり」とのべて、聖書を単に文字として読むのでなく、現実の生活の中で読むことを説いたが、たびたび、繰返して日々の生活の中で聖書を読んで、それを書きとどめると共に、彼の歩みの基盤としていたことがうかがえる。晩年の田中正造の行動の基盤となった聖書のことばの理解することなしに、田中正造の思想は充分に把握されないといっても過言ではあるまい。

第二に、これらの聖句が書きとどめられた年代をみると、おおむね、明治四〇年五月から大正二年七月に集中して

いる。周知のように、彼が大正二年九月四日に永眠したとき、その遺品の中に、新約聖書があったが、彼はそれをその生涯の終りまで読んでいたことを知ることが出来る。また、晩年、田中正造が新井奥邃の教えをうけるようになって、聖書をめぐる彼の静思が深まったと思われる。田中正造は、晩年にこう記している。「予近来岡田氏の静座により万事の発展力を為セリ。新井翁の聖書ニよりて日二三度省ルノ心を失ハシメズ」（XIII五〇三、T2・6）

第三に、田中正造が参照している数多くの聖句のなかで、彼が最も多く参照している聖句について考えてみたい。その聖句は、「人はパンのみにて生くるにあらず」（マタイ四ノ四）ということばがある。彼は、この聖句を、前後二四回書きとどめている。他の聖句が一回ないし、せいぜい三回にわたっているのに対し、どうしてこの聖句が、このように多く用いられているのか。田中正造は、どういう理由からこの聖句にかくも深くひかれていたのであろうか。

このことばが、聖書に記されているのは、イエスが、荒野で四十日、四十夜断食して、悪魔に誘惑されたときであった。空腹の極みに達していたとき、「もしあなたが神の子であるなら、これらの石がパンになるように命じてごらんなさい。」という悪魔の問いにこたえてイエスが発したことばであった。物質的な生活においては、谷中の残留民の生活は、欠乏と困窮の極みにあった。一つのパン、一握りのめしの重要性を彼はよく知っていた。しかし、それだけが、人間の生きる力の源でないと彼は悟っていた。彼はいう、「一ツのパン容易ならず、一握のめし是誠に我生命なり。然れども人はパンのみにて生けるものニあらずとハ、之神のあるありとの御言葉なり。」（XI三三〇、M42・8・26）彼は、このことを、谷中の残留民の生活からつぶさに学んでいた。パンは外の世界であった。生命は内の世界であった。前者は、物質の世界であり、後者は精神の世界であった。彼は、この二つを、あれかこれかの二者択一のかたちで問わなかった。彼はいう、「谷中一百人は定職、定住、定食ナク、水中の仮小屋ニ生活する三ケ年、人ハパンノミヲ以テ生るものニあらず」と。（XI四六、M43・6・29）

第四に、これらの聖書のことばは、可成り断片的なひろがりをもっているが、主としてマタイによる福音書からとられている。田中正造が、新約聖書のマタイによる福音書の分冊と帝国憲法を糸で綴じて常に携帯していたということからも、彼がマタイによる福音書をつねづね愛読していたことが、これらの引用聖句からも裏付けられる。なかんずく、彼はそれらの聖句を、約束のことばとして受けとっている。先きにものべたように、彼の生涯は、大雨に打たれたたかれてゆく牛のようなもので、そのわだちの跡かたも消え失せるものであった。そうした中にあって、聖書に根ざした信仰が彼に希望を与えた。「神を知らざれバ人は失望す。予が政治ニ倦めるときハ神をしらざれバなり」（XII三五、M44・7・21）が彼の真実な告白であった。こうした点からいうなら、田中正造は、聖書のことばは、倫理的な厳しい誡めというよりも、失望しがちな彼に希望を与えるものであった。彼にとっては、聖書は約束の書物であり、希望の書物であった。だから、彼は、「一日の苦労は、その日一日だけで十分である」（マタイ6・34）ということばを愛誦した。このことばは、その日、その日おもむくままに生きたらよいという刹那的な生き方ではなく、「神の国と神の義とを求め」てその日その日を生きることに十分さを見出したものであった。田中正造のいう「一日十分主義」というのは、聖書にある終末的な約束の視点からはじめて理解されるものであるように思う。

注

（1）林竹二『田中正造―その生と戦いの「根本義」』田畑書店、一九七四年。
（2）田中正造全集編纂委員会編、『田中正造全集』全一九巻、別巻一、岩波書店、一九七七年―八〇年。
（3）林竹二、前掲書、八七頁、なお全集にはこのことばは見出されない。
（4）由井正臣『田中正造』岩波新書、一九八四年、二一〇頁。
（5）工藤直太郎『新井奥邃の人と思想』、新井奥邃の思想』一九八四年、青山館　工藤直太郎『新井奥邃の人と思想2、内観祈禱録、奥邃先生の面影』青山館、一九八四年。

(6) 田中正造は、自分に影響を及ぼしたキリスト教の友人としてつぎのような人びとを列挙している。「然れども我友、島田、巌本、三好、松村、内村、安部、石川、木下、逸見、和田、本田(多)、矢島、佐藤」全集第十一巻、三三八頁。

(7) 全集第十一巻、四一九頁。

(8) 林竹二、前掲書、二〇八頁。

(たけなか　まさお・同志社大学神学部教授)